

入選

やさしさにふれた笑顔

栃木県 栃木第四小学校 四年

齋藤 柚里

わたしが3年生のときのことです。熱が出て、学校を1週間休んでしまったことがありました。

そのとき、1つ下の学年の子が、わたしの家まで宿題を持ってきてくれました。その宿題といっしょに、一通の手紙が入っていました。そこには、

「ゆずりちゃんへ。元気になったら、また遊んだり、勉強したりしようね。」と、書いてありました。わたしはそれを読んで、ポロポロとなみだが出てきました。手紙には続きがありました。

「みんな待っているの、早く元気になってください。先生より」

わたしは、まわりにこんなに心配してくれる人たちがいることを実感しました。

次の日も手紙と宿題が届きました。手紙には、

「元気になってね。がんばれ。」と書いてありました。

さみしかった気持ちが、「すぐになおすぞ」という気持ちにかわりました。でも、熱が下がっても、今度は頭がいたくなつてのくり返しで、たいへんな日が続きました。そんなとき、また手紙がとどきました。

「遊べるように、元気になってまたさい会しようね。」

今までと、文字数はそれほどかわらないのに、ふしぎと心にひびく手紙でした。ふたたび、「元気になろう」という気持ちが高まって、こまめに水分をとるようにしていたら、少しずつ回ふくしてきました。一番つらかったときに読めなかった、2通の手紙も読みました。

「熱が上がったと聞きましたが、だいじょうぶですか。」

「熱は下がったかな。早く元気になってね。」

読んでいて、またなみだが出ました。うれしさで、心があたたかくなりました。病気で体がつらいとき、学校に行けなくてさびしいとき、友達から毎日とどいた手紙、それを読んでわたしは、いろいろなことを感じました。

最初の手紙で、「さみしいな。早く学校に行きたいな」と思い、「早く元気になるぞ」という勇気がわきました。自分の体のことを心配してくれている言葉で、友達に会いたくなりました。自分が本当につらいとき、さびしいときかけられたやさしい言葉は、たとえ短くても心にひびき、こんなにも心を元気にしてくれることがわかりました。

そして、すっかり元気になり、とうとう登校できる日が来ました。ひさびさの登校、本当なら不安もあるはずですが、わたしは友達に会えることがうれしくて、楽しみでしかありませんでした。

「おはよう。」友達を見つけました。

「手紙、どうもありがとう。」

「どういたしまして。」

笑顔で伝えると、友達の笑顔が返ってきました。

「やっぱり友達っていいな。」